

# 新・福岡古楽音楽祭 2015

## 報告書



新・福岡古楽音楽祭 2015  
FOKUKA EARLY MUSIC FESTIVAL 2015

イタリアン・バロックの栄華

2015年10月23日(金) - 25日(日) 会場: アクロス福岡、あいれふ

23	マスタークラスI 室内楽コンサート「イタリアン・バロックの室内楽 L'Incontro(再会)」	10:30-17:30 18:00開演	あいれふ講堂(10F) あいれふホール(10F)
24	古楽セミナー(古楽アンサンブル、合唱) マスタークラスII 古楽ステージ(第1部) ワルター・ファン・ハヴェーラークコンサート	9:30-18:00 10:30-18:45 14:30-18:00 17:00開演	アクロス福岡 アクロス福岡 アクロス福岡 国際会議場(4F) アクロス福岡 国際会議場(4F)
25	古楽ステージ(第2部) チェンパロ・ワークショップ ジュリアーノ・カネニエーラ&ヴェニス・バロック・オーケストラ	10:30-18:00 11:30-18:30 18:00開演	アクロス福岡 コミュニケーションエリア(1F) アクロス福岡 国際ホール(1F) アクロス福岡 シンフォニーホール(1F)

主催：新・福岡古楽音楽祭実行委員会 共催：福岡市 福岡市 (公財)アクロス福岡 (公財)福岡市文化芸術振興財団  
お問い合わせ：新・福岡古楽音楽祭実行委員会事務局  
info@kogaku.fes@gmail.com http://www.kogaku.net  
TEL 092-725-9327(10:00-11:45)

【関連企画】新・福岡古楽音楽祭2015イベント展 10/12(金)～13(土) 10:00-18:00(観覧料1000円) アクロス福岡 コミュニケーションエリア(1F)

【会期】 2015年10月23日 (金) ~25日 (日)

【会場】 あいれふホール 福岡市中央区舞鶴2-5-1

アクロス福岡 福岡市中央区天神1-1-1

新・福岡古楽音楽祭 実行委員会

〒810-0001 福岡市中央区天神1-1-1-2F

(公財) アクロス福岡事業部企画グループ内

TEL 092-725-9327 FAX 092-725-9102

Email: kogaku.fes@gmail.com

URL: http://www.kogaku.net/

# 新・福岡古楽音楽祭2015 報告書

## 目次

開催概要	3
タイムテーブル	3
入場者数	4
実施概要	
室内楽コンサート「イタリアン・バロックの室内楽～L'Incontro(再会)～」	5
ワルター・ファン・ハウヴェ トークコンサート～リコーダー演奏の歴史～	7
ジュリアーノ・カルミニョーラ&ヴェニス・バロック・オーケストラ	9
古楽マスタークラス	11
古楽セミナー	13
古楽ステージ	14
チェンバロ・ワークショップ	16
交歓パーティ	17
古楽器、CDの展示	18
プレコンサート	19
関連イベント	20
パネル展	20
看板	21
チラシ	
新・福岡古楽音楽祭2015総合チラシ	23
室内楽コンサート「イタリアン・バロックの室内楽～L'Incontro(再会)～」	25
ワルター・ファン・ハウヴェ トークコンサート～リコーダー演奏の歴史～	27
ジュリアーノ・カルミニョーラ & ヴェニス・バロック・オーケストラ	29
プレコンサート(その1)「ドミニク・ヴィス&ストラディヴァリア」	31
プレコンサート(その2) ～古楽との出会い～	33
新聞記事	
読売新聞(6/29朝刊)	35
読売新聞(9/25朝刊)	35
西日本新聞(9/30夕刊)	35
読売新聞(10/3朝刊)	36
朝日新聞(10/6朝刊)	36
読売新聞(10/9朝刊)	37
西日本新聞(10/10夕刊)	37
毎日新聞(10/11)	37
日本経済新聞(10/19夕刊)	38
西日本新聞(10/20朝刊)	38
雑誌記事	
古楽情報誌アントレ(2015年12月号)	39
メンバー名簿	44
2016年の実施概要予定	44



## 開催概要

- 名称：新・福岡古楽音楽祭2015 ～イタリアン・バロックの栄華～
- 目的：これまで地元・全国の多くの方に親しまれて来た「福岡古楽音楽祭」が第15回（2013年）で一区切りとなったことを受け、旧来の音楽祭のミッション（①プロのコンサート、②アマチュアの発表の場、③参加者の研鑽と交流の場）を引き継ぎ、新しい世代が企画・運営に関わって、これまで守られてきた音楽祭の理念を継承し、福岡から全国へ古楽の魅力を発信する。
- 主催：新・福岡古楽音楽祭実行委員会、18世紀音楽祭協会、福岡県、福岡市、公益財団法人アクロス福岡、公益財団法人福岡市文化芸術振興財団
- 会期：2015年10月23日(金)・24日(土)・25日(日)
- 会場：あいにふ（福岡市健康づくりサポートセンター）、アクロス福岡
- 講師：鈴木美登里（声楽）、若松夏美（バロック・ヴァイオリン）、鈴木秀美（チェロ）、上尾直毅（チェンバロ）、ワルター・ファン・ハウヴェ（リコーダー）、佐藤豊彦（リュート）、前田りり子（フラウト・トラヴェルソ）、安積道也（合唱）、岩田耕作（アンサンブル）、山本香代子（チェンバロ）
- 実施事業：コンサート（3公演）、セミナー（2種類）、マスタークラス（7コース）、古楽ステージ
- 特別企画：ワルター・ファン・ハウヴェ トークコンサート、パネル展
- 展示出展：7社
- 来場者数：延べ6,687人
- プレコンサート：ドミニク・ヴィス&ストラディヴァリア（9月16日）、古楽との出会い（10月12日）
- 関連イベント：ミュージック☆ファクトリー「ルネサンスのひびき～古楽器のアンサンブル～」  
ハルモニ－・セレスト「イタリア vs フランス バロック音楽聴き比べ」

## タイムテーブル

### 10月23日（金）

13:30-17:30	マスタークラス（リコーダー）	あいにふ講堂（10F）
開演19:00	室内楽コンサート「イタリアン・バロックの室内楽L'Incontro（再会）」	あいにふホール（10F）

### 10月24日（土）

9:30-16:00	古楽セミナー（古楽アンサンブル、合唱）	アクロス福岡 円形ホール（1F）、交流ギャラリー（2F）
10:00-16:40	マスタークラス（ヴァイオリン、チェロ、フルート、チェンバロ、声楽、リュート、リコーダー）	アクロス福岡 練習室ほか
14:00-16:00	古楽ステージ【第1部】	アクロス福岡 国際会議場（4F）
開演17:00	ワルター・ファン・ハウヴェ トークコンサート	アクロス福岡 国際会議場（4F）

### 10月25日（日）

10:30-11:30	古楽セミナー（古楽アンサンブル）	アクロス福岡 練習室（地下2F）
10:30-13:30	古楽ステージ【第2部】	アクロス福岡 コミュニケーションエリア（1F）
11:00-13:30	チェンバロ・ワークショップ	アクロス福岡 円形ホール（1F）
開演15:00	ジュリアーノ・カルミニョーラ & ヴェニス・バロック・オーケストラ	アクロス福岡 シンフォニーホール（1F）

## 新・福岡古楽音楽祭2015 来場者（参加者）データ

来場者数 6,687 名

### 内訳

10月23日	マスタークラス 室内楽コンサート ミュージック☆ファクトリー（関連イベント） ハルモニー・セレスト（関連イベント）	49名 201名 48名 53名
10月24日	古楽セミナー/マスタークラス 交歓パーティ 古楽ステージ（第1部） ワルター・ファン・ハウヴェ トークコンサート	304名 41名 202名 230名
10月25日	古楽ステージ（第2部） フィナーレ（古楽ステージ） 古楽セミナー チェンバロ・ワークショップ ジュリアーノ・カルミニョーラ& ヴェニス・バロック・オーケストラ	190名 213名 32名 37名 1,021名
10月23日～ 25日	パネル展	875名
	<b>音楽祭期間中の合計</b>	<b>3,496名</b>

9月16日	プレイベント（その1） 「ドミニク・ヴィス&ストラディヴァリア」	577名
10月21日	プレイベント（その2） ～古楽との出会い～	867名
10月12日～ 22日	パネル展	1,747名



## 室内楽コンサート

### 「イタリアン・バロックの室内楽 L'Incontro (再会)」

日時：2015年10月23日 19:00開演

会場：あいれふホール

主催：18世紀音楽祭協会、新・福岡古楽音楽祭実行委員会、福岡県、福岡市、  
(公財)アクロス福岡、(公財)福岡市文化芸術振興財団

出演者：若松夏美（ヴァイオリン）、鈴木美登里（ソプラノ）、鈴木秀美（チェロ）、  
上尾直毅（チェンバロ）

プログラム：

メールラ「喜び歌え」

マリーニ「ヴァイオリンソナタ作品8-3 『ヴァリアータ』イ短調」

マック「レ・ファ・ミ・ソによるカプリチヨ」

ヴィヴァルディ「チェロ・ソナタ変口長調」

～休憩～

ストラッチェ「パッサカリアイ短調」

ヴェラチーニ「ヴァイオリンソナタ（ソナタ・アカデミケ）作品2-12ト短調」

ジェミニアーニ「チェロ・ソナタ ニ短調作品5-2」

ヴィヴァルディ「愛しい顔から離れれば」

#### ■実行委員レポート

新・福岡古楽音楽祭2015の幕開けとなる第1曲は、今年没後350年を迎えたメールラ（1594/95年～1665年）の「喜び歌え」。メールラはモンテヴェルディより少し後に登場した、イタリアのバロック初期を代表する作曲家です。「喜び歌え」は神様を賛美する歌だそうですが、従来の典型的な宗教音楽とは異なって軽快な3拍子の曲で、鈴木美登里氏の伸びやかな歌声が清廉で一体感のあるアンサンブルのもとで会場すみずみに届き、あいれふホールが一気に祝祭的な雰囲気になりました。



続いて、バロック期において新しい発展を見せた器楽作品が次々に登場し、ヴァイオリン、チェロ、チェンバロによる劇的な感情表現を堪能することができました。マリーニの「ヴァイオリン・ソナタ」（作品8-3）では、苦悩を物語るかのような旋律が連続と紡ぎだされた一方、ヴェラチーニの「ソナタ・アカデミケ」（作品2-12）ではヴァイオリンが雄弁と語り、時にチェロと対話するかのような二重奏を聴くことができました。

古楽音楽祭の会期に先立って行われたプレコンサート（10月21日、アクロス福岡シンフォニーホール）では、鈴木秀美氏より「当時の楽器は現在のモダン楽器のように響かないものの『語る』ことには非常に適した楽器である」ことが紹介されました。確かに当日演奏されたバッハの無伴奏チェロ組曲第1番では、大きな空間でもアーティキュレーションが分かりやすく、チェロがあたかも詩を紡ぐように歌っていたことが印象的でした。一方、本日のプログラム（10月23日）では、ヴァイオリンの名手ジェミニアーニ作曲による「チェロソナタ」（作品5-2）が演奏され、チェロが多様多彩な装飾をのせながら自在に饒舌に歌うさまを親密な空間で聴くことができました。



上尾直毅氏のチェンバロソロによる、マックの「レ・ファ・ミ・ソによるカプリッチョ」では、調和のとれたルネサンス時代の音楽から脱却し、それまで禁じられていた半音や不協和音を使うなど、作曲家たちが新しい時代への挑戦を模索していたことが追体験できました。

今年のテーマ（イタリアン・バロックの栄華）に合わせて、バロック期のイタリアの作曲家に焦点を当てた本日のプログラム。締めくくりは、ヴィヴァルディによる世俗カンタータ「愛しい顔から離れれば」。ヴィヴァルディは器楽曲のみならず声楽曲やオペラも多数作曲したと言われていますが、実際に声楽作品を聴く機会は少ないのではないのでしょうか。器楽アンサンブルに鈴木美登里氏の豊かな歌声が合わさって色彩感に溢れ、あたかもバロック・オペラの1シーンでヒロインが心情を歌い上げているかのようなひと時でした。





---

## ワルター・ファン・ハウヴェ トークコンサート ～リコーダー演奏の歴史～

---

日時：2015年10月24日 17:00開演

会場：アクロス福岡 国際会議場（4F）

主催：新・福岡古楽音楽祭実行委員会、18世紀音楽祭協会、福岡県、福岡市、  
（公財）アクロス福岡、（公財）福岡市文化芸術振興財団

出演者：ワルター・ファン・ハウヴェ（リコーダー）、佐藤豊彦（リュート）

### ■実行委員レポート

古楽音楽祭2日目には、これまでの福岡古楽音楽祭でも縁の深かったハウヴェ氏によるトークコンサートが行われました。ハウヴェ氏と45年来の旧友である佐藤豊彦氏が通訳とリュート共演をつとめました。

古楽音楽祭で取り上げられる作品は、ルネサンスやバロック時代のものが多いですが、このトークコンサートでは、イタリアの作曲家ベリオ（1925年～2003年）の“Gesti（ジェスティ）”（1966年）に関する話から始まりました。

ハウヴェ氏がオランダでリコーダー奏者として活動し始めた1960年代、リコーダーのために書かれた作品は多くなく、「それまでに発掘された40年分くらいのバロック時代の作品」と「5年分程度の現代曲」のストックしかなかったそうです。そのような中で、リコーダーのために書かれた“Gesti”は、4～5分ほどの曲ながら、リコーダー奏法に革新をもたらしました。

“Gesti”の楽譜は、奏法を記号で示した新しい記譜法によるもので、作品を贈られたブリュッヘン氏（ハウヴェ氏の師匠）は当時その楽譜を見て「困惑した」というほど斬新なものでした。しかし、この作品を演奏するために呼吸、息、口、タンギングなどの使い方をコントロールし、それぞれの効果を組み合わせ、連ねていくことによって、表現の幅を無限に広げていくことが可能になったのです。



ハウヴェ氏によって演奏された“Gesti”は、リコーダーの音とは思えないような破裂音や声も登場し、緩急に満ちたスリリングな瞬間の連続でした。奏者がリコーダーを通して渾身のコミュニケーションを行っているようで、この作品がgesti (gesture=ジェスチャー)と名付けられていることが体現されているようでした。“Gesti”の登場によって、この作品で要求される様々なアーティキュレーション、タンギングなどは、他の作品を演奏する際にも使えるということが認識されました。

すなわちリコーダーの奏法の可能性が格段に広がり、リコーダーのために作曲された作品でなくても、それまでに発掘された「過去500年分の作品」を演奏できるようになったということでした。



例えばJ.S.バッハの「アルマンド」(BWV1013)はゆったりしたテンポの曲ですが、ゆっくりであるほど、ハーモニーや音と音との関係（アーティキュレーション）について考える必要が出てきます。そこでいかに旋律をつなげるか、といったテクニックのあり方を考える際には、“Gesti”で培った奏法技術が応用できるとのことでした。

次に例として演奏されたのは、ヴィルジニアーノの「リチェルカータ」でした。最初に素材を集めて主題が提示された後に、バリエーションを加えながら「本気で作曲を始め」て新しいカデンツァのあり方を探求(ricercare)するという構造の作品です。一音一音にはヴィブラートがかかっていないにもかかわらず、様々に軌跡を変え、変幻していく旋律を全体として聴くと、起伏に富んで濃淡が描き出されていることが感じ取られました。

1時間のトークコンサートは、佐藤豊彦氏の作曲による「うつろい」の共演で締めくくられました。古楽界で音楽表現の可能性を探究し、切り拓いて来たお二人ならではの息の合った演奏で、リコーダーとリュートの音があたかも尺八と琴の音であるかのように聞こえました。



本日のトークコンサートを通して、リコーダー奏法の奥深い世界を知ることができたとともに、ハウヴェ氏がリコーダーを例にとりながらも、他の楽器全般に共通する音楽表現の可能性の話をしていることが伝わって来ました。古楽は過去の作品における表現のあり方を探究する人たちによって紡がれ、開拓されて来たということを実感し、対峙してきた人たち（ハウヴェ氏、佐藤氏）の歴史に触れることができる意義深い時間となりました。



---

## ジュリアーノ・カルミニョーラ & ヴェニス・バロック・オーケストラ

---

日時：2015年10月25日 開演15:00

会場：アクロス福岡 シンフォニーホール

主催：新・福岡古楽音楽祭実行委員会、18世紀音楽祭協会、福岡県、福岡市、  
(公財)アクロス福岡、(公財)福岡市文化芸術振興財団、読売新聞社、  
FBS福岡放送、「福岡・音楽の秋」実行委員会

出演者：ジュリアーノ・カルミニョーラ (バロック・ヴァイオリン)  
ヴェニス・バロック・オーケストラ

プログラム：

- ヴィヴァルディ 歌劇《オリンピアード》より「シンフォニア」ハ長調 RV.725
- ガルツピ 4声の協奏曲 第3番ニ長調
- マルチェッロ 弦楽のための協奏曲集《ラ・チェトラ》より 第4番ホ短調
- ヴィヴァルディ ヴァイオリン協奏曲 ヘ長調「聖ロレンツォの祝日のために」RV.286
- ヴィヴァルディ ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 RV.281
- ヴィヴァルディ ヴァイオリン協奏曲 ハ長調 RV.187
- ヴィヴァルディ ヴァイオリン協奏曲 ヘ長調 RV.283
- ヴィヴァルディ ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 RV.232

### ■実行委員レポート

本日のプログラムのメインに据えられたのは、ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲 (RV281, RV187, RV283, RV232) でした。ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲というと「調和の靈感」や、「四季」が含まれる「和声と創意への試み」が思い浮かびますが、本日のコンサートでは生で聴く機会の少ない曲目が選ばれました。

ルネサンス時代までの音楽は声楽を中心に発展してきましたが、バロック時代に入ると器楽曲において新たにソナタや協奏曲などの形式が生み出され発展しました。独奏楽器と弦楽合奏群が掛け合う「独奏協奏曲 (ソロコンチェルト)」は、ヴィヴァルディの時代に特に発展し、急一緩一急の3楽章の形式もヴィヴァルディによって確立されたものといわれます。



©椎原 一久

本日のプログラムは、そのような急—緩—急のコントラストが存分に楽しめる構成で、特に急楽章ではトゥッティに弦楽器群（集団）ならではの迫力と疾走感があり、一緒に駆けているような気分を味わえました。

カルミニョーラ氏のポウイングは、楽器から距離をおいて上から振り下ろすような特徴があり、とてもダイナミックで、なおかつそこから紡ぎだされる音は変幻自在です。緩楽章では、アンサンブルが極上のまとまり感を見せつつも各楽器がそれぞれの色彩感を放ち、その上にカルミニョーラ氏の独奏による「語り」が自由自在にのせられていきます。バロック期において、声楽（独唱）による劇的な感情表現が発達していったように、器楽でも独奏が発達し、様々な表現の可能性が拓かれていったことが体感できました。

舞台上のカルミニョーラ氏は、足でリズムをとったり、踊っているようだったり、全身で音楽を体現しているかのようでした。曲間にはぼそぼそと独り言を言っているような飄々とした側面もあり、事前にもっていたイメージ（チラシで見たカリスマ的な写真のイメージ）が覆され親しみを感じた人も多かったようです。

鳴り止まない拍手に応じて、アンコールは4曲が演奏されました。4曲目にヴィヴァルディの「夏」が演奏され、「最後に『四季』が聞けた」という聴衆の嬉しい喜びで会場がざわつきました。室内楽コンサート(10月23日)と合わせてイタリアン・バロックを堪能できる珠玉の公演となりました。



©椎原 一久

#### ◆聴衆の声（アンケートより）

- 節目毎に足を踏みながら強く弾かれる指揮者の演奏に音楽の楽しさを感じました。  
長い時間立って演奏されるのも驚きでした。（福岡市・男性・70代以上）
- 古楽の見方が一変してしまうような演奏。ダンスを踊っているみたいなカルミニョーラさん。  
素晴しかった。そして何より楽しかった！（福岡市・女性・40代）
- スタートから、何と温かい音色を出す楽団なのだろうと思いました。そして、カルミニョーラ氏が現れて、引き締まった演奏に変わり、違った風合いに引き込まれました。（福岡市・女性・50代）